

はしがき

——「コンタクト・ゾーン」に見る北東アジアの「近代」の多面性

島根県立大学北東アジア地域研究センター長

李 暁 東

一.

人間文化研究機構（NIHU）の地域研究推進事業「北東アジア」の島根県立大学研究拠点が推進している研究プロジェクト「北東アジアにおける近代的空間の形成とその影響」は、2019年度に4年目に突入した。本研究プロジェクトはこれまで、北東アジア各地域の特徴を明らかにすべく、一年目に「胚胎期の諸相」、二年目に「胎動期の諸相」、そして、三年目は「近代の始動」というテーマで毎年複数のシンポジウムや研究会を開催し、内外の研究者とともに、時間軸に沿って北東アジアにおける多様な近代的空間の形成の諸相を追ってきた。これまでの各シンポジウムでは、とくに、「統治理念」、「制度」、「交流」という三つの側面から、北東アジア地域における諸々の「コンタクト・ゾーン」を中心に、それらの在り方と特徴を考察してきた。

2019年に、本研究拠点は、10月5日にソウル大学で同大学のアジア研究所との共同開催でシンポジウム「北東アジアにおける『近代』空間の形成：帝国と思想」、また、同年の12月14日に国際日本文化研究センターで本拠点の研究パートナー、同センターの劉建輝教授のご協力の下でシンポジウム「北東アジア近代空間の成立——いわゆる満蒙を中心に」をそれぞれ開催した。『北東アジア研究』別冊の本号は、昨年度のこの二つのシンポジウムの成果の一部としてまとめたものである。

二つのシンポジウムのプログラムは次のとおりである。

1. シンポジウム「北東アジアにおける『近代』空間の形成：帝国と思想」

日時：2019年10月5日（土）

場所：ソウル大学アジア研究所

主催：ソウル大学アジア研究所、大学共同利用機関法人人間文化研究機構、島根県立大学 NEAR センター

開会の辞：張寅性（ソウル大学）

趣旨説明：李暁東（島根県立大学）

第1部

報告1：山本健三(島根県立大学)
「朝鮮アナーキストとロシア——申采浩を中心に」

討 論：盧グァンボム(ソウル大学)

報告2：李慶美(東北亜歴史財団)
「1920年代の植民地朝鮮における「生の政治言説」」

討 論：李曉東

報告3：李正吉(人間文化研究機構)
「韓国の民主主義の起源について」

討 論：李ジョンイン(春川教育大学)

第2部

報告4：金仁洙(建国大学)
「日本軍の対ソ連情報思想戦：朝鮮軍と関東軍の事例とその含意」

討 論：庵送由香(立命館大学)

報告5：青木雅浩(東京外国語大学)
「ポトー事件とロシアの反ボリシェヴィキ派」

討 論：李ビョンレ(韓国外国語大学)

第3部

報告6：文明基(国民大学)
「台湾、朝鮮の植民地史の比較研究——警察及び警察補助機構を中心に」

討 論：岡本真希子(津田塾大学)

報告7：黄克武(台湾中央研究院近代史研究所)
「言葉、戦争と東アジアの国族の境界——「中国本部」概念の起源と変遷」

討 論：李熙玉(成均館大学)

閉会の辞：李曉東

2. シンポジウム「北東アジア近代空間の成立——いわゆる満蒙を中心に」

日時：2019年12月14日(土)

場所：国際日本文化研究センター

開会趣旨説明：李曉東

第1部

報告1：王中忱(日文研外国人研究員/清華大学)
「表象される『蒙疆』——深澤省三を中心として」

報告2：高燕文(総合研究大学院大学・博士課程)
「山田清三郎の目に映った満州開拓地——『私の開拓地手記』を中心に」

報告3：単荷君（総合研究大学院大学・博士課程）

「第一次占領期における青島軍政署の都市開発——日本人新市街の形成を中心に」

報告4：袁漸達（日文研外国人来訪研究員／カナダグエルフ大学）

「矛盾的抉抉：再探究満州国早期的中国政府首脳官員（1932-1937）」

報告5：靳巍（大阪市立大学都市文化研究センター研究員）

「帝国日本と『満州』綿羊改良事業」

第2部

報告6：周閔（北京語言大学）

「岡倉天心の中国旅行と中国認識——初回の中国旅行を中心に」

報告7：劉建輝（日文研）

「反転するモダニズム——租借地大連の都市空間と文化生産」

総合討論：黄克武（台湾中央研究院）、井上治、山本健三、李曉東、石田徹、李正吉（以上、島根県立大学）

二.

1919年に、「民族自決」の理念に後押しされて「三・一運動」、「五・四運動」が起きた。これらの運動の百周年という節目の年に上記の二つのシンポジウムを開催して北東アジアの「近代」について議論をすることができたのはたいへん意義深かった。

18世紀の西洋発の「近代」の東漸により、北東アジア地域は近代化過程に入ることとなった。諸地域の近代化の過程に遅速の差が大きく、そして、これらのモダナイゼーションズは多様な相を呈していたが、近代的国家システムに否応なしに組み込まれる過程で、対内的には独立した主権国家と自由平等な均質的な国民の創出を目指し、対外的には排他的なナショナリズムによって「外」との差別化を強く意識するようになった、などの点では同じである。

しかし、北東アジア諸地域の近代国家創出に対する追求は困難を極めた荆棘の道にならざるを得なかった。西欧発の自由、平等などの近代的理念とともに、植民地主義、帝国主義も共時的に北東アジアに東漸したからである。相対的に順調に近代国家の確立に成功した明治日本においても、「百卷の万国公法は数門の大砲に若かず、幾冊の和親条約は一筐の弾薬に若かず。大砲弾薬は以て有る道理を主張するの備えに非ずして無き道理を造るの器械なり」（福沢諭吉「通俗国権論」）という認識が多くの人々によって共有されていた。「禽獣世界」、「虎狼世界」という北東アジアの人々の世界認識もやはり「近代」によって作り出されたものにほかならなかった。このように、自由、平等、民権を抱擁することと、「優勝劣敗」の法則のなかでナショナル独立と自主を追求することとは、ともに北東

アジアの近代化にとっての不可避な課題であったのである。さらに、皮肉なことに、「富国強兵」を通して「入欧」を達成したとともに「力の福音」を味わった日本は、北東アジアにおける光と影の両面を含む「近代」の輸出者として振る舞うようになり、このことは北東アジアにおける「近代」的空間の性格をより入り組んだ複雑なものにした。

一方で、第一次世界大戦末期に、「民族自決」がソヴィエト政権やウィルソン主義によって唱えられ、それは国際政治の新しい時代の到来を告げるものだった。民族自決主義は自主独立を求める諸民族の人々を大きく鼓舞した。北東アジア諸地域の人々は植民地支配、帝国主義に抵抗するために自主独立の権利を求めるとともに、近代的デモクラシーを追求した。自主独立と民主主義とは、言わばセットになって追求されていたのである。例えば、中国の「五・四」運動が「民主・科学」を高く掲げたのはそのことを象徴するものだったと言ってよい。

のみならず、第一次世界大戦の最中に成立したソヴィエト政権とその社会主義理念は資本主義、帝国主義に対峙する「近代」の今一つの流れとして、北東アジアの諸地域に大きな影響を与えた。北東アジアはイデオロギー対立と闘争の時代に突入していき、ソヴィエト・ロシア、コミユテルンは北東アジア諸国と諸地域の国家形成や建設過程に深く刻印せずにはいられなかった。

このように、西欧で通時的に形成された様々な形をとった「近代」が共時的に北東アジアに入り、北東アジア各地域の伝統や文化と交錯して、複雑な性格を持つ「近代」を形成するとともに、それらの近代化過程に大きなタイムラグをもたらしたのである。

本特集は北東アジア地域の近代化過程をもろもろの「コンタクト・ゾーン」のなかで考察する。「コンタクト・ゾーン」とは、「近代」の東漸と在来の地域社会とのコンタクトが多様な変化をもたらす「接壤地域」という空間を指している。北東アジアの「近代的空間」において、一方では、西洋人にもそれに対応できずに「狼狽」（福沢諭吉「民情一心」）させた蒸気船車、電信、郵便、印刷などの近代的物質文明や、「西洋文明の精神」が受容され、他方では、「文明」化は強制と抑圧を伴って、植民地支配を正当化する口実として推し進められた。諸々の「コンタクト・ゾーン」のなかで推進されていた近代化政策は、多様な形をとっていた固有の交流の在り方や、通用していた慣行、観念との間に軋轢を生じさせ、多くの反発と抵抗を招いた。近代化には、「近代」の背景の中で諸地域の在来の伝統や文化に対する破壊、そして、人々に対する抑圧の側面があったことを見逃してはならないことは言うまでもない。

それに加えて、「近代」によって生み出された抑圧の構造は、ただ西欧という他者によって、外部より迫ってきたにとどまらず、北東アジアの内部においても生産されていた。いち早く近代化を達成した日本は地域内部で植民地主義を再生産した。このような日本によって表象された「近代」は日本内部、そして北東アジア地域全体で様々なコンタクト＝コンフリクトを生み出した。

本特集は近代の植民地主義の論理によって支配された地域をはじめとしたコンタクト・ゾーンを中心に、それらの地域における諸力、諸文化の間のコンタクト——多くの場合、コンフリクトの形をとったコンタクト——の中において屈折した北東アジアの「近代」の在り方を見る。その場合、コンタクトは対等なものではなかった。その意味では、コンタクト＝コンフリクトの中から生まれた抑圧性は、抑圧を加える側とそれを受ける側とに二分化して、「抑圧・支配—反発・抵抗」という枠組みで捉えることは正当である。しかし一方で、複雑な様相を呈したコンタクトはこのような単線的な認識枠組みだけでは捉えきれないこともまた明らかなことである。「近代」の「光」と「影」に濃淡があり、抵抗も一筋縄ではいかぬ屈折したものであったからである。本特集の諸論文は北東アジアにおける複雑で屈折な「近代」の様相を多角的に論じたところに特色がある。

三.

以下、本特集の諸論文を概観しながら、各々語られている北東アジアの近代の特徴を見ることにしたい。

まず、弱小民族が「外」からの強大なパワーに左右されながらも、自主自立や近代国家の形成を追求する過程で余儀なく直面をさせられた屈折と難しさを中国や、モンゴル、朝鮮などの視点から論じたのは、黄克武、李慶美、青木雅浩、李正吉の諸論文である。

黄克武論文は、China Proper という西洋での造語が日本によって「中国本部」として翻訳され、その後、中国で流行っていた経緯を実証した重厚な論文である。China Proper は本来、西洋人が清朝を理解するために作り出された言葉で、「本部」の観念は伝統的な華夷秩序下の「藩部」と区別された「(行)省」という概念に対応している。それが1870年代に日本語に翻訳された後、やがて、中国は「中国本部」のみで、それ以外の、例えば満蒙などの地域は中国に属さないという言説が生まれた。「中国本部」の概念が1890年代に中国に輸入された後、清朝を倒すことを目的とする清末の種族革命論が「本部十八省」の範囲内で漢民族国家の建国を唱えたが、中華民国の建国後、とくに1930年代に日本の侵略が深まるにつれ、中華民族の意識が強まったなかで、「中国本部」概念は日本の侵略を正当化する言葉として糾弾されるようになった。のみならず、この言葉をめぐって、問題提起した顧頡剛と費孝通との間に論争が起きた。中国では、民族的境界をなくすという一元的な統一を重視すべきか、それとも多民族性を前提にする「多元一体」を重視すべきか、両氏の論争によって提起された中国のネーション・ビルディングのあり方の課題は今日まで続いている。

黄論文は言葉の翻訳、流布、そして言葉の意味の変遷に対する緻密な考察を通して、清朝から版図を受け継いだ中国が近代国家建設におけるアイデンティティ形成過程の複雑さと屈折さを描き出したのみならず、論文は中国の「近代」に対する受容過程とナショナルリ

ズム形成過程とにおける「日本」という他者の重要性を物語っているものでもある。

植民地主義に対する抵抗の屈折性を真正面から論じたのは李慶美論文である。李論文は、朝鮮植民地時代の抵抗運動をただ非妥協的な「独立」を主張するか否かという基準で測ることの問題性を超えるべく、1924年に『東亜日報』に掲載された李光洙の「民族的経緯」とその背景となる「研政会」組織を取り上げて考察した。李光洙たちは日本帝国の「主権性」に抵触しないという総督府が育成する「文化政治」ののちで「合法的な運動」を展開し、とりわけ運動の政治化を模索した。従来の見方では、李光洙の論説は「独立への意志を曲げる行為」として捉えられ、『東亜日報』の民族主義勢力が作った「研政会」も総督府と事前の協議を経て、いわば合法的に創られたため、「親日団体」として糾弾されることが多い。しかし著者は、この合法的な運動は、実際、「独立」色を払拭した一方、「新たな政治言説」を構成しようとして、政治を生活と結合し「生」の政治言説化を通して新たな政治的領域を開拓したとともに、民族の自己決定を追求したものであった、とその意義を力説したのである。

ここでの民族の自己決定は実質的に「独立」の主張が求めたものとは一致したものであったことは言うまでもない。李光洙の主張に見られた屈折な抵抗の在り方は、従来の妥協・非妥協、自治・独立という二項対立の捉え方から見えない地点にあった。論文は、「抵抗」という言葉がもつ意義をより普遍的な文脈に開いて捉えることの必要性を提起した。

さらに、自主自立を追求することの難しさをモンゴルの視点から論じたのは青木雅浩論文である。青木論文は、1921年に成立したモンゴル人民政府に対するソヴィエトの影響をボドー事件とその経緯について実証を通して明らかにした。モンゴル人民政府はソヴィエト・ロシアの援助を受けて成立したもののだが、人民政府の指導者の一人であったボドーは外モンゴルに対するソヴィエトの過剰な干渉を批判し、特に満州を中心とした国外勢力と関係を築こうとした。それに対して、外モンゴルでソヴィエト、コミンテルンの活動を指導する立場にあったオフチンは、ボドーの活動は満州における外モンゴルへの関与を試みる反ボリシェヴィキ派のセミョーノフや、張作霖、日本とつながっており、ソヴィエトとモンゴル人民政府にとって危険であったと判断して、ボドーを粛清した。事件は、ロシア革命後のソヴィエト・ロシアと反ボリシェヴィキ派との対立が外モンゴルの政治情勢を形成し、モンゴル人民政府による国家建設は初めからそうした国外情勢の強い影響下に置かれていたことを意味するものだった。言い換えれば、モンゴル人民政府の国内政治はソヴィエトの国内政治の論理によって左右されていたということであった。

弱小民族は植民地主義、帝国主義に圧迫されたなかで自主自立を至上課題とした一方、近代的民主主義の理念を「公理」を実現したものとしてその導入と確立に努めた。「民主、科学」を掲げた中国の「五・四」運動はそうだったし、朝鮮が自主独立を追求する過程は同時に民主主義を模索する歴史過程でもあったのである。李正吉論文はそのような視点か

ら、韓国の民主主義は決して戦後に「外」から初めて「与えられた」ものではなく、民主主義の淵源を歴史の中から見出そうとした試みである。

李論文は朝鮮末期（1876年から1899年）を三つの局面に分けて、民主主義理念に対する認識の成長過程を「選挙、分権、人権、平等」などの民主主義の理念に基づいて考察した。第一局面の開化思想に「選挙、分権」という近代的意識が含まれていたが、それらのごく一部の知識人の間に限られていた。第二局面において、広く影響があった東学の「人乃天」思想のなかに四民平等、人道主義が含まれており、「輔国安民」思想のなかに儒教的民本思想と入り組んだ形で人権、平等の意識が育まれていた。また、第三局面において、1896年に創刊され、広く読まれた『独立新聞』と、大勢の民衆が参加した独立協会主催の討論会とでは、近代的な「人権と平等」、法制度の実施などが謳われ、伝統的な性格を残しつつも、民主主義的な理念が広く浸透していた。著者は、このような過程のなかで培われ次第に広まった民主主義的な意識は決して見落としてはならない重要な歴史的資源だと説いている。

朝鮮末期以降の歴史を振り返れば、大国政治に翻弄されつつ、屈折しながらも「近代」を追求し続けた歴史が植民地時代を挟んで脈々と戦後韓国の民主主義の発展につながったことは明らかである。

上記の諸論文は独立自主に対する追求の難しさと抵抗の屈折さを論じたものだが、それに対して、劉建輝論文は同じ植民地支配に置かれていた大連に注目し、日露戦争後に日本が獲得した大連における「文化生産」を考察して、帝国発のモダニズムが大連で反転されることを見たことについて論じた興味深い論文である。

日本は大連において50年間にわたって「植民地」経営を行ったが、市政ではロシア統治時代の「遺産」を拡大再生産しつつ、インフラ整備を通して日本帝国の権力を象徴する空間を創出した。一方文化面では、国際性の高い開港都市であった大連は、むしろ日本内地に対抗する形で「モダン都市」として成長を遂げた。著者は日本のモダニズム詩運動の先駆安西冬衛のモダニズム詩を例にして、詩人が大連というモダン都市と「悠久な大地」という新旧文明の「対峙」の地で感性を磨き、それを内面化、身体化したことによって、日本内地の詩人が得られなかった創造＝創造力を手にし、「対峙」と「撞着」のモメントを詩のなかに生かしてダイナミックスを創出したことを論じた。

同時代の内地の日本社会が少しずつ閉そく感を深めていったのに対して、皮肉なことに大連は内地を含む日本の唯一の自由港として開放性を保持していたゆえに、また、異質な新旧文化が交錯する「コンタクト・ゾーン」として、逆に輸入先の「内地」よりもモダン文化を発達させることができたのである。

一方、上記の、圧迫され支配される側の視点から支配側に目を転じれば、植民地支配そのものは絶えず土着の伝統や文化とぶつかり、内外の環境などの要素によって左右されて、思わぬ展開になった。例えば、満州国での「民族協和」の理想は、結局、「キメラ」

（山室信一）と表現されているように、いびつな形になっていた。統治者側にメスを入れたのは、文明基、金仁洙、高燕文の諸論文である。

文明基論文は、浸透力や調達力を内容とし、制度の力（institutional capacity）を重視する「基盤権力」（infrastructural power）をキーワードに、日本の植民地台湾と朝鮮における末端行政機関の在り方と行政人員の量的比較を通して、植民地支配の実際状況を明らかにした。台湾と朝鮮が日本の植民地支配下に置かれた後に、相次いで行政末端とそれ以下のレベルで制度的整備が行われた。「根本的な変化」を回避しようとした施政は旧来のコミュニティの単位を利用し、行政末端機関は台湾では「街庄」、朝鮮では「面」が生かされ、末端機関以下の基層行政は台湾では「保甲制」、朝鮮では「洞里」、区が利用された。それとともに、警察による一般行政への支援とされる「助長行政」も日本の行政の延長上で設けられた。しかし、著者は基層行政にかかわる基層行政機関数や行政人員数などの具体的な数字の比較を通して、基層行政に効果的に介入する「警察国家」の理想は、台湾では、保甲制を利用することによって世界の植民地史上例外的に達成できたのに対し、朝鮮では実現できなかったことを論証した。朝鮮総督府は地方有力者の包摂と活用に成功できず、結局、朝鮮の村の長老が主導する「村落政治」が行政浸透の障害となったのである。論文は植民地支配が必然的に抑圧と抵抗の構造を生み出すことを具体的なデータを通して示した。

金仁洙論文は日中戦争期の朝鮮駐屯日本軍と関東軍の対ソ連情報思想戦の実態を実証的に考察した。戦前日本はソ連国民と日本内外の少数者である朝鮮人や白系ロシア人を対象に情報戦、思想戦、宣伝戦を積極的に展開した。1930年代に始まった朝鮮駐屯日本軍の宣伝報道機関の活動はとくに報道部の設立によって活発になっていた。朝鮮内部の情報宣伝戦以外に、思想転向者座談会を実施して投降ソ連兵を宣伝に利用し、対ソ連ラジオ放送などが行われた。一方の関東軍は、ロシア革命後にソ連を追われ満州に居住していた「反共」白系ロシア人を対ソ情報思想戦に利用した。関東軍は白系ロシア人青年の訓練計画を整備し、白系ロシア人部隊を編成したとともに、「白系露人事務局」を設置しその管理に当たさせたが、結局、失敗に終わった。著者によれば、関東軍の満州国における白系露人政策は常に場しのぎ的なものであったと同時に、これを利用するという視点から打ち出されたものであり、また、そもそも白系露人をその情報宣伝活動の先端に位置づけようとする自体は、「民族協和」社会の一員として白系露人を包摂しようとした満州国の公式イデオロギーとは衝突したものだ。情報思想戦は、結局、「言葉」による宣伝と「身体」の実体験との乖離を引き起こしたのである。また、著者によれば、このような敵と味方を峻別する発想は戦後のイデオロギー対立のなかで再生産されたと考えても可能だった。

また、高燕文論文は、これまであまり注目されてこなかった作家山田清三郎の満州開拓地見学の経歴に注目し、彼の開拓地手記に対するテキスト分析を通して「満州国」の「民

族協和」イデオロギーと現実との間のずれを考察したものである。プロレタリア文学作家山田が転向した翌年に、「新生」を求めて満州に赴いた。満蒙開拓に多大の関心を示した彼は「満州新天地」で大自然の美しさと移民の日常生活に驚きと感動を覚えた一方、開拓地の生活、教育などの面の環境の厳しさに接し、その「暗い一面」にも驚きを感じた。そして何よりも、現地の日本開拓民と原住民との関係や結合問題に関心を持った彼は、「民族協和」という理想の達成に憧憬しつつも、親和の裏にあった原住民たちの日本人に対する恐怖と警戒心を見逃さなかった。しかし、彼は下層の人々へのまなざしをもつ一方、日本人としての優位意識から抜けることができず、彼にとっての「民族協和」も日本人移民が指導民族だという前提に成り立っていたものだった。支配と被支配の関係のなかで、事実とかけ離れたスローガンは、結局、空疎なものにならざるを得なかったのである。

以上のように、本特集は、「近代化」、「ナショナリズム」、「植民地支配」などを背景に、北東アジア地域の中の「コンタクト・ゾーン」における多様な「近代」の在り方について多角的に考察した。「コンタクト・ゾーン」に焦点を当てることによって、多様なコンタクトの在り方によってもたらされた北東アジアの「近代」の多様な性格を明らかにする努力は本特集の各論文にとどまらず、昨年度に開催した二つのシンポジウムにおける諸報告の共通した狙いでもあった。本特集では昨年度の研究成果のすべてを提示することができないが、「支配・被支配」や「圧迫・抵抗」、「光・影」に二分化するという捉え方だけでは見落とされがちな諸モメントに注目して、豊かな視点で北東アジアの「近代」の諸相のもつ複雑性と屈折をあぶりだすことができたと言ってよい。

最後に、本研究プロジェクトは今年度で最終年度を迎えた。今後、これまでの五年間の研究成果をまとめて、論文集を日・中・韓三か国語で出版する予定である。乞うご期待。

